


4. 好きな言葉と若者へのメッセージ

何ごとにもまっすぐ、そして相手への気遣いを忘れず

安原史紀氏は、つねに自らに言い聞かせている言葉が2つある。1つに、「何ごとにも正面からまっすぐ」に素直な気持ちで取り組むことである。2つに、「相手への気遣いを怠らない」ことである。安原氏は、これらの言葉を肝に銘じることで会社の危機を脱し、目的を達成できた経験がある。

1962年、ヤスハラ紙関連部門の大口の取引先である大王製紙（株）が経営不振で赤字に陥り、会社更生法の適用を申請した。その後、一般紙市場に本格参入する1978年まで苦境に立たされた。その際、その余波を受けてヤスハラは多額の負債を抱え込み、経営状態が急速に悪化した。安原氏は、窮地に立たされたが、この時期にこそ「何ごとにもまっすぐ」に諦めず根気強くがんばろうと踏ん張った。当時あった経営資源を十分に活用し、「範囲の経済」のもとで事業の多角化を試みたのである。しかし、新規開拓にはかなり苦戦した。

最初は営業に行っても相手にされず無視されたり、「ばか者」と罵られたり、何度も悔しい思いをした。安原氏は、それでも諦めなかった。そのうち相手にしてくれなかった人も根気負けし、また応援してくれる人も少しずつ増えていき、新たな販路を開拓することができた。その結果、逆境のなかで従来の3倍以上の売上を叩き出したのである。この時期の苦い経験と成功が、1990年代以降のタオル不況による売上減少後の多角事業化にも生かされることとなる。

安原氏にとってこの成功体験は何ものにも代え難いものとなり、自信にも繋がった。しかし、一人で目的を達成したわけではない。達成への道のりで、従業員や顧客など多くの人に助けられた。人の助けが得られたのは、安原氏がどんなことがあっても相手への気遣いを忘れずいたからである。

安原氏は、会社の若い従業員にも「正面からまっすぐ行け」と叱咤激励している。何よりも自らが経験した感動や達成感を、できればかれらにも体感してほしいとおもっている。仕事は生活するための手段であるが、「義務でやるんじゃなく、目標を立てて、それを達成するためにがんばる。目標を達成したときは、すごく嬉しいんですよ。そういう快感が得られると自信に繋がるんですよ」と安原氏は言う。

ヤスハラ of 従業員のみなならず、これからの若い世代には、どんな困難に直面しても「前向き姿勢」で、みんなと一緒に発展することを忘れないようにがんばってほしいと願う。

5. 印象に残っている本

ユダヤ人家庭の子供教育に感銘

昔読んだ本のなかで安原氏がもっとも印象に残っているのは、ユダヤ人の家庭教育について書かれた本である。それが、『ユダヤ式家庭教育』（ミリアム・レヴィ、母袋夏生訳、ミルトス、1990年）である。



ミリアム・レヴィ、母袋夏生訳、『ユダヤ式家庭教育』上下巻、ミルトス、1990年

昔から商売に長けているユダヤ人はどのような教育を子供たちにおこなっているのか、という安原氏の好奇心によってこの本に巡り合った。読んでいるうちに、親による子供の家庭教育がユダヤ人の人格形成においても、将来の高い能力の発揮においても、その土台となっていることがわかった。子供を育てるうえで「家庭教育の重要性」はどここの国でもおなじようにもおもえるが、実際には他人任せだったり、コミュニケーション不足だったり、忙しい現代社会において実践するのはそう簡単ではない。一般に、ユダヤ人による家庭教育は手間と時間を惜しまない。幼児期の宗教・道徳教育を基礎として、社会の一員としてのモラルと主体性を育み、親との信頼関係を築くことを大切にしている。

安原氏は、「兎にも角にも、生まれて判断力がつくまでは親が子供にちゃんと躡ると、立派でなくともなんとかマシな人間に成長できるんですね。わたしも親に躡ってもらったから、なんとかやっっていける人間になったんじゃないかな」と言う。

なるほど、世界規模で活躍しているユダヤ人、またはユダヤ人の血を引く人々は相当な数に上る。まず、世界的に有名なユダヤ人企業家としては、たとえば映画配給会社のフォックス・フィルムズ（のちの20世紀フォックス映画）創設者のウィリアム・フォックス、日本では大阪にあるテーマパークのユニバーサル・スタジオ（U.S.J.）設立者のカール・レムリ、コンピュータのメーカーで有名なデル社創設者のマイケル・デル、フェイスブック（facebook）創業者のマーク・ザッカーバーグなど枚挙にいとまがない。

また、ユダヤ人の人口は世界人口の約0.2%程度だが、ノーベル賞の受賞者の割合は約20%以上を占める。たとえば、アルバート・アインシュタイン（1921年ノーベル物理学賞受賞）、ネリー・ザックス（1966年ノーベル文学賞受賞）、ロアルド・ホフマン（1981年ノーベル化学賞受賞）、ポール・クルーグマン（2008年ノーベル経済学賞の受賞者）など、国籍はさまざまであるが数多くいる。

その他、カール・マルクス（『資本論』を記した経済学者）やジョン・フォン・ノイマン（コンピュータの動作原理を発明した科学者）など、やはり世界に影響を与えた人材を輩出している。

ユダヤ人家庭教育だけが優れているわけではないが、安原氏が言うように、教育は社会形成の基盤であり、その基盤を盤石するためには教育が重要であることは疑い得ない。（完）



参考文献

尾道市「尾道商業会議所記念館 第30回企画展示解説」2016年。
株式会社ヤスハラ「PROFILE」（企業パンフレット）。

杉浦勝章「日本の製紙産業における産業再編と生産配置」『下関市立大学論集』第61巻第1号、下関市立大学学会、2017年5月、91-104頁。

米川伸一「ドイツ染料工業と『イー・ゲー染料株式会社』の成立過程」『一橋論叢』第64巻第5号、一橋大学、1970年11月、575-611頁。

編集後記

安原史紀さんの本籍は広島県福山市。(株)ヤスハラの原点も福山市。(株)安原商店からスピアウトしたヤスハラケミカル(株)の本社は福山市に隣接する府中市。福山市と今治市は距離にして約70km。昔は連絡船で2時間30分、いまは自動車です。福山・府中・尾道と今治は、広島県と愛媛県という別の県に属していますが、ヒト、モノ、カネ、情報の交流の観点から言えば、たとえば「しまなみ県」といった地域区分の方がしっくりきます。

山より海の交通ルートが早くから発達し、今治の特産品である綿織物のみならず桜井漆器や菊間瓦などは、瀬戸内海を介して中国地方、九州地方、関西地方へ運ばれ取引されてきました。近年は自動車で運ばれることが多くなりましたが、いずれにしても「海側」において経済活動におけるネットワークが形成されています。そう言えば、こうしたモノづくりをカネの側面から支えるために、広島銀行が今治に支店を設けた歴史も古く、現在もつづいています。

「しまなみ県」がしっくりいく証拠のひとつとして、安原さんの本籍がある福山市には鞆の浦という観光名所がありますが、鞆の浦のシンボルマークになっている對潮楼（福寿寺）の立派な瓦は、菊間瓦が使われています。ちなみに、對潮楼は、朝鮮通信使が立ち寄った場所であり、坂本龍馬のいろは丸沈没に際して談判した場所でもあります。



對潮楼（福寿寺）

ヤスハラの原点であり、安原さんが本籍をおく福山市。そして、安原さんが生まれ育ち、ヤスハラが誕生した今治市。この両地域の深い結び付きを、安原さんの人生をとおして垣間見ることができました。（辻）

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の25人目は、次世代のタオル技術者の育成に心血を注ぐ白石裕二氏である。今治タオルの抱える問題として人材不足が挙げられるが、白石氏は、愛媛県立今治高等技術専門校（現在の愛媛県立産業技術専門校）で講師を長年務めており、タオル製造に従事する人材を数多く輩出してきた。白石氏が講師に就いた経緯や教育者としてのモットーなどについて、自らの人生史とともに語っていただく。